

## 市川昆監督、東宝・フジテレビ提携映画『竹取物語』

山田利博

一

後に詳述するように、これが上映されたのは昭和六十二年の秋であるから、早二十年ほど前の作品であるが、一昨年の四月にDVD化された。もちろんビデオはあったわけだが、上映からこれだけ時間が経つてのDVD化というのは、やはり珍しかろう。別にそれを記念してというわけでもないけれども、本稿が徐々に明かしていくように、一見すると突拍子もない場面の連続のように見えながら、子細に見ればそうでもなく、私も毎年教養の授業のまとめとして用いており、しかもそこそこ学生の反応も良い割には、管見が及んだ限りではまだ誰も分析していないこの作品に、一度は言及しておく価値があると判断したためである。

その突拍子もない場面とは、五つの難題（但し、次節で紹介するように、この映画では求婚者は三人しか登場しないから、この映画においては「三つの難題」の一つ「龍の頸の玉」の「龍」が恐竜であったり、かぐや姫を迎えに来る「飛ぶ車」が、当時流行していたスピルバーグの『未知との遭遇』を思わせる絢爛豪華なUFOであったり、かぐや姫が地球に来た理由は宇宙船の事故と語られるのは良いとしても、そこで使われる「生存者」という語が、平安時代の作品としては相応しくないなどといった評は、上映当時の院生仲間から聞かされたが、別稿でも述べたように、この程度の改変は、興行を主目的とする映画においては仕方がないのであり、そのような些細な点に目くじらを立てるべきではなからうと思う。その

証拠の一つとなるかどうか分からないが、この映画でも御多分に漏れず、かぐや姫の衣装はいわゆる十二単である。平安時代の専門家でなければそんなところに抵抗を感じないかも知れないが、俗に言う十二単は平安中期の成立であり、平安初期になった『竹取物語』の時代にあつたはずがない。したがってかぐや姫の衣装は、浦島太郎の絵本の乙姫が着ているような、奈良時代の名残のものが正しいのだが、この映画は無知の故に「十二単」を採用したわけではない。プログラムによれば、「時代考証を忠実に守るより衣装として美しくみえることにポイントを置いた（二三頁目）<sup>3</sup>」からであり、同じく見栄えのために、実際の「十二単」の一・五倍の大きさに作つてあるという。つまりは確信犯であるわけで、だとすれば先ほど述べたような点にこだわるのも、さほど意味のあることとも思われない。ではどのようなところに注目すれば良いか、以下に論述していこう。

二

この種の論を成す時にはいつもしていることだが、先ず基礎的な事実から紹介しよう。この映画の上映は、最初に述べたように昭和六十二年秋。主演は沢口靖子である。竹取翁は三船敏郎、嫗・若尾文子、帝・石坂浩二、后・岸田今日子、庫持皇子・春風亭小朝、阿部右大臣・当時活躍していたコメディアン・コント山口君と竹田君の竹田君、大伴大納言・中井貴一、そしてこれは原作にはないが、それなり重要な役所として道尊僧正<sup>3</sup>・伊東四朗、かぐや姫の知恵袋

である盲目の娘・明野（あけの）に小高恵美、密偵・理世（りせ）に中村嘉津雄といった配役。続いて主に原作に無い部分を中心に粗筋を紹介する。

映画の最後に字幕が出るが、時は八世紀末（七九〇年頃）という括弧書きあり）、晩年にやつと授かった一人娘加耶（かや）を、貧困のため五歳で病死させた竹取翁と嫗（特に嫗）は悲嘆に沈んでいた。その時天地を揺るがす大変動（後にかくや姫を乗せた宇宙船の墜落と明かされる）が起こり、加耶の墓のある竹林が炎上する。炎が治まった後様子を見に行った翁は、加耶の墓の隣に筒型の光る物体を発見する。さらにその物体は細い光を加耶の墓と繋げ、何か（後の展開から察するに、加耶の遺伝情報であろう）を読み取っている様子であったが、やがてその物体が割れ、中から人間の赤ん坊らしきものが現れる。と見る間にその赤ん坊は成長し、五歳くらいの少女へと変貌する。その顔は目が青い他は加耶そっくりなこともあり、翁は自宅へ連れ帰る。娘を亡くしたことを翁より悲しんでいた嫗は、当然その娘（以下、この作品の呼称に従い、加耶と呼ぶ）を引き取ることを決めるが、村の大人や子供はその怪異な風貌や原作にもある治癒能力により、ことあるごとに異端視し、それを庇っているうちに翁にも親心が生じてくる。

一方、加耶の入っていた入れ物には実は純金であることが分かり、翁はそれを砕いて売ることによって、原作通り次第に富んでくるが、それと同時に市中に不審な黄金が出回ることになり、翁の家は密偵の理世に見張られることになる。そんなある日、翁と嫗が帰宅すると、家の中には目も黒くなり、成人の女性に変貌した加耶がいる。例によって嫗は、「本当の加耶の年頃になった」と受け入れ、翁は並の育ちようではない加耶の素姓を隠すため、山里から離れた貴族の別邸が多い場所に寝殿造風の家を営むことにする。実は翁には、美しく成長した加耶に貴族の婿を迎え、あわよくば自分も貴族の末

席に連れて貰おうという、富貴になった者が抱きがちなもう一つの野心があったのだが、その狙い通り、加耶の美しさは評判となり、庫持皇子と阿部右大臣が求婚者として現れる（この時庫持皇子が「輝くのか」の字を掛けて）彼女をかぐや姫と命名する）。

そんなある日、加耶が野原で思いに耽っていると暴れ馬が通りかかり、助けてくれたのが盲目でありながら勘の非常に鋭い明野であった。医者であった死んだ父に手ほどきを受けた彼女は「異国の本や古い文書」に詳しく、加耶に色々な知恵を授けてくれる。ちょうどその頃、偶然出会った大伴大納言に一目惚れをした加耶は、新たに求婚者の一人に加わった大納言も含めて、求婚者達の気持ちを試したくなる。そこで明野の助言を入れて難題を出すということになるのであるが、その辺りは落ちまで含めてほぼ原作通りなので省略しよう。ただ役柄上、大納言だけは当然異なり、誠実に龍を探し求めた彼は、やがて恐竜と戦うこととなり、船が難破してしまう。

その知らせが加耶のもとに届いた頃、加耶が竹林で拾われた頃から片時も手放さなかった水晶のような玉が光り、次の満月に本星から迎えが来ること、すなわち別れの時であることを告げる。それを聞いた嫗は、玉さえなくなれば迎えが来なくなるのではと思い、湖に捨てるのだが、その玉は生命維持装置（映画中の用語を使えば、「この地の姫の正気を支えていた」）も兼ねていたらしく、姫は意識不明になってしまう。折しも異人に助けられ、帰ってきた大納言がそのことを知り、自ら水中に潜って玉を回収し、姫の正気を取り戻すのだが、大納言との別れをはかなんだ姫は、大納言がいる「この地で果てたい」と入水自殺を図る。それを引き留めた大納言は解決策を見出せぬまま、それでも諦めることなく、運命の日を二人で迎える覚悟をする。

そこから先は巨大UFOが出現する以外はほぼ原作通りなので省略に従うが、既に何回か言及したように、一見原作破りのように見

える箇所でも、いわゆる現代的理性に合わせれば、その方が合理的と思えるものが幾つもある。例えば冒頭、原作には語られない翁と姫の実娘の存在も、当時「竹取」というのは最下層に近い職業で、竹の中から黄金を見つける前の段階では、血の繋がらない子供を養育する余裕など無かったはずなのに、何故竹取翁はかぐや姫を引き取る決心をしたのかという疑問に良く答えてくれるし、『竹取物語』の原型たる天人女房譚養女型には申し子譚の色彩もあるから、語られていないからと言って原作にも、この可能性が全く無いとは言い切れない。

また、これこそ原作には全く存在しない明野も、地球に来て僅か三か月余りで、しかも当時の女性の常識から余り外出したはずのなかぐや姫が何故五つの難題を知っていたかという答えには確かになつていないし、原作末尾で姫に去られた翁と姫の様子は、「かぐや姫の残した不老不死の・稿者注）薬も食はず、やがて起きも上がらで、病み臥せり」（八三頁）とあり、はっきりとは語られていないが、多分そのまま死んだと思われ、それは余りだろうという現代人の感傷に対しては、姫がUFOに乗り込んでからやや間があつて（多分この間にこれまでの事情を説明したのであろう）、UFOから一つの光が飛び出し、明野の目を治すという形で、恐らくその後彼女がかぐや姫の代わりに翁と姫の養女となると、一つの救いを与えている。

さらにこれも存在の無い理世は有能な密偵で、かぐや姫についての真実を全て調べ上げるが、それをありのまま帝に奏上したために、平安時代人としては当然ながら、事実を受け止めきれない帝により職を解かれ、放逐された時、「わしの言っていることが絵空事だど？フン、何も知らないくせに。わしはこの目でちゃんと見ているんだ。信じられないことが起こっているのだ。今に驚くぞ！その時わしはお前達をあざ笑ってやる」とぼやき、その理世ですら想像を絶する

出来事が起つたため、結局これは実現しなかったが、『竹取物語』の主題の一つと言われる、貴族批判を明確化している。

これらの事象にも既に窺えるように、この映画の作者は原作を良く咀嚼していると思われるが、その辺りの機微を次節以下で、原作の表層的面と深層的面から解析してみよう。

### 三

既に述べたように、原作では五人である求婚者の数が、この映画では三人に減らされているが、周知のように原作の求婚者も、もとは三人であつたのではないかと推定されている。ただ、その場合は通常、石作皇子・庫持皇子・阿部右大臣の三人と考えるから、これは二時間という映画の尺に合わせた結果の偶然的符合と思われるが、庫持皇子の春風亭小朝と阿部右大臣のコント竹田君というのはなかなか適役と言える。何故なら、原作では庫持皇子は「心たばかりある人」とされ（三二頁）、その通りに偽物の蓬莱の玉の枝を作り、行きもしないのに三頁にも及ぶ嘘の体談により、かぐや姫をすんの所まで追いつめるからで、映画ではそれほど長くはないが、先行イメージとして嘶家というのは上手い配役と言えるであろう。また、皇子が「文部の長を務められる人」であるという設定も、原作には無いがなるほどと思わせる。さらに原作ではさほど強い印象は無いが、唐の商人に欺かれて偽物の火鼠の皮衣を買わされ、当人は本物だと信じてかぐや姫の眼前で火にくべ、皮が燃え上がって「あへなし」という語で落ちる（四〇頁）阿部右大臣も、取りようによっては確かに滑稽にも思われ、コメディアン の起用というのは理に適っている。

他に、映画開始の直後に、翁や姫から細工物を買っている、常田富士男扮する商人の宇陀（うだ）が翁達の家を訪ねてくるというシーンから実質的な話の幕が上がるという構成は、最近再び始まったが、

当時彼と市原悦子が『まんが日本昔話』のナレーターを務めていたことより、原作の冒頭「今は昔」に相当する、見る者を昔話の世界に引き込む技巧と考えられるし、原作がかぐや姫という人間以外の主人公を設定した理由の一つと思われる。「帝の召してのたまはむこと、かしこしとも思はず」（五九頁）、「国王の仰せごとを背かは、はや殺し給ひてよかし」（六〇頁）という姫の科白も、

姫「帝のお召しも、畏れ多いとは思いません」

帝「けしからんことを言う。私の言いつけに従わない者がどう

なるか、分かっているのか」

姫「帝のお言葉に背くのがいけないのなら、どんなお仕置きで

もお受けいたします」

（翁と姫の科白略）

帝「死も厭わんのか」

姫「厭いません」

と、ほぼそのままの会話で存在するし、原作のその部分を読めば誰しも分かることではあるが、省略した部分に、「こんな思い切ったことが言えるのは、やはり只者ではないからだ」という翁の科白も存在する。

加えて、「人間は、まだまだ知らない途方もないものがあることを知らねばならないのだ」という、帝の最後の科白に隠れて余り目立たないが、かぐや姫が人間の心を身に付けていくキーワードの一つとされる「あはれ」も、「人間の真心、忘れません」という形で一応存在する。だが真に驚愕すべきは、一見荒唐無稽に見える、かぐや姫が持つ水晶のような玉、通信機の存在なのである。

稿者はこの映画を見るまで迂闊にも見落としていたが、原作のいよいよ十五夜という場面に、「……親たちのかへりみを、いささかだにつかうまつらでまからむ途もやすくもあるまじきに、日ごろも出で居て、今年ばかりの暇を申しつれど、さらに許されぬによりて

なむ、かく思ひ嘆き侍る。……」という箇所は確かに存在する（七六頁）のである。無論、平安時代のことだから、実体的なものではなからうが、ではどうやってかぐや姫は月と通信したのか、或いは当時、仙界と人間界の繋がりをどのように認識していたのだろうかといった新たな疑問が次々湧いてくる実に刺激的な作品なのである。これだけでもこの映画の存在価値はあろうというものだが、実はもう一つ、これらと違い、明示されているわけではないが、この映画独特の解釈が存在する。節を改めて説明しよう。

#### 四

表面的には原作と相違が無いので粗筋のところでは省略したが、この映画のかぐや姫昇天の場面には一つの特徴がある。それは、月光をイメージする青白い照明に溶け込むような白い「十二単」を着ていることである。『源氏物語』玉鬘巻で、光源氏は明石御方に「白き小桂」を贈っているから、白い「十二単」が存在していなかったわけではないが、この場合特別なものは、まず、かぐや姫が「わたしを愛しんでくださった皆様に何の御恩返しもせずにお別れするのが悲しゅうございます。お父様、お母様、長い間お世話になりました。有難うございました。お父様、お母様を大切にしてください。お願いします」と切り出すと、姫は泣いて何も答えられず、堪りかねた翁が、「おい、おい、加耶が何か言うところぞ。お前も何か言うてやらんか」と言うシーンが存在するからである。

もちろん原作にも、先ほど引用した箇所他に、「この国に生まれぬとならば、嘆かせたてまつらぬほどまで侍らで、過ぎ別れぬること。返すがへす本意なくこそ侍れ。……」という手紙を残したとあり（七九〜八〇頁）、これに類似する言葉がないことはないのだが、実際その場面を見なければ雰囲気は分かりづらいだろうし、今はもうやっていないかも知れないけれど、この場面は娘が嫁に行く

前の親子の会話を思わせる。すなわち姫の昇天場面に婚姻が重ねられているということである。

さらに、姫の昇天時、宮中で帝と后、道尊僧正の三人がそれを見送る場面には、「夢を見ているのでしょうか」との後の問いに対し道尊僧正が、「生を受けた者が消えていくのに何の不思議がある」と答える科白があるし、プログラムによればそういう設定らしいが、最後にUFOが逆転して飛び去っていくと、実はその形は蓮の花型であることにより、仏教的イメージを醸し出すとなると、取りようによってはこれは、死の場面も重ねられていることになる。

二〇年前にこの映画を初めて見た時、フェリス女学院大学の三田村雅子氏にも確認を取ったことがあるが、古典文学に親しんだ者にとつてはこの三者を重ねるのにさほど不思議はない。分かりやすい死との重ね合わせから説明すれば、多分一般的にそのように使っていると思うが、先ほど何気なく用いたかぐや姫の「昇天」という言葉には、文字通り「死」の概念が含まれている。これが決してこじつけではないことは、かぐや姫に次の満月の昇天を告白された翁の科白、「われこそ死なぬ」(七十二頁)や、『源氏物語』に於けるかぐや姫の末裔とされる紫上が、八月十四日に亡くなり、翌十五日に茶毘に付されること等からも明らかである。したがって、これだけの重ね合わせならさほどでもないと言えるが、俗に冠婚葬祭と言われるように、婚姻と死も、通過儀礼という点では実は同じなのである。原作の昇天の場面に婚姻を重ねる余地があるかどうかはなお検討したいが、試みとしては面白かるう。何よりその場面を改めて通過儀礼の一齣として読むきっかけを与えてくれることにおいては、やはり秀逸と思うのである。

## 五

以上、市川昆監督、東宝・フジテレビ提携映画『竹取物語』が、

文学作品を加工したものとしては秀逸と思われる所以を粗々説明してきたが如何であろうか。どうせ文学を加工するならば、このように原典に参照し得る可能性を有したものととして欲しいものである。

注(1) 拙稿「源氏物語の映像化」(伊井春樹編『講座源氏物語研究』第一巻 おうふう 近刊予定)。

(2) これには頁数が全く無いので、表紙の裏を一頁目と認定して計算した。表紙の裏は通常の本では頁数に入れていないと思われるが、これは見開きで一枚の絵となつていたので、数えざるを得なかった。

(3) 帝のブレンらしい。当時そうした存在があつたことは確かだし、後にも触れることになるが、例えば「帝は自分の命令に従わぬ者などと思っておられなかつたので、誇りを大いに傷つけられ、お怒りになつてゐる。その反面その娘(かぐや姫・稿者注)にますます興味を持たれた」のように、原作では明示されていない行間を明確化するのに役立つ。

(4) 因みに近年の室伏信助氏の説(角川ソフィア文庫『竹取物語』(平13)解説)によれば、『竹取物語』の成立年代(『竹取物語』の場合、成立年代決定方法の一つとして、最末尾の富士噴火の記事を使うから、必然的にこれがほぼ物語中の時代ともなる・稿者注)は、八八三年頃ということになる。これ以前の説も大体九世紀の末頃であるから、これが何によつたものかは不明である。

(5) 余談に近いが、この時姫は「お墓が燃えたら加耶がかわいそう」と反応するに対し、翁は「墓も墓だが、竹林が燃えたら竹細工が出来なくなる。こりゃあ飯の食い上げだあ」と反応する。これに端的に示されているように、この作品では最初のうち翁は、原作よりも金銭的欲望に囚われている卑小な人物として描かれ、それが求婚者達(庫持皇子と阿部右大臣)の醜い有様を見て改心するという筋書きとなつてゐる。原作の主題の一つに、当時権力を握つ



- ていた貴族に対する批判というのは既に指摘されているから、現代人にはこの方が分かりやすいかも知れないが、単純な図式とは言えよう。
- (6) 欧米人のように澄んだ青い瞳ではなく、青白く濁り、瞳もはつきりしない。この映画より十五年ほど前に上映された、『エクソシスト』の主役の少女を思わせる目の色である。かぐや姫が宇宙人であることを象徴するらしい。
- (7) 「この児の容貌のけうらなること、世になく、家の内は、暗き所なく、光満ちたり。翁、心地あしく苦しみ時も、この子を見れば、苦しみこともやみぬ」(一〇頁。以下、『竹取物語』の本文引用は、新潮古典集成による)。但し原作ではこの後「腹立たしきこともなぐさみにけり」と続くから、狭い視野で見れば、かぐや姫の治癒能力は精神的なものに限られるのかも知れないが、肉体的なものまで含む可能性は否定できない。後述するように、原文にかなり依拠しているのも、この映画を高く評価する一因である。
- (8) 映画の中の用語を使えば「こんな時(＝事故・稿者注)の場合に備えてある入れ物」、すなわち脱出力プセルであるらしい。しかし、金属の中でも熱伝導率が高い金が脱出力プセルに向く素材であるか否かは昔から気になっている。
- (9) 但し、周知の如く原作では、「竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹取るに、節を隔ててよ」ことに、黄金ある竹を見つくること重なりぬ。かくて、翁やうやう豊になりゆく(二〇頁)とあるから、厳密には違う。ただこれも後述するように、それを評価するか否かは意見が分かれるだろうが、現代人にはこの方が分かりやすかろう。こうした描き方もこの作品の特徴の一つである。
- (10) その最初のシーンで、原作の「穴をくじり、垣間見、惑ひあへり」(二二頁)を思わせる、野次馬らしき者達が塀や木によじ登る光景が映される。もつとも、原作の「闇の夜に出でて」とは違う昼の風景であるが、現代との生活習慣の相違を考慮すれば仕方ない所であろう。
- (11) 経緯は違うが、「輝く」を掛けるというのも原作と同じ。後述するように、この映画の作者(映画作りの過程が良く分からないので、これが脚本家(但し、その内の一人に市川崑も名を連ねている)によるものなのか監督によるものなのか不明なため、仮にこう呼称しておく)は良く原文を読み込んでいる。
- (12) 周知の如く原作でかぐや姫が愛したのは帝であって、これが最大の相違点ではある。この理由は良く分からないが、石坂浩二扮する帝とでは、年齢的に釣り合わなかったからではなからうか。しかし原作の帝として、年齢表示があるわけではないし、平安時代の常識から言えば、中井貴一を帝に据えてもそれほど不自然とは思われないが、それが現代と当時の「帝」に対するイメージの違いか、或いはこの作品では権力と恋愛を分離したかったからであろう。
- (13) これも評価が難しいが、プログラムによれば、この映画ではかぐや姫は月から来たということになっていない(六頁目)。素性が分かったとき姫に、どこから来たか尋ねられ、ただ漠然と月の方を指さしたので、翁達が勝手に月から来たかと誤解したということになっている。今ほど天体の知識がなかった平安時代の人に説明するには、確かにこのような方法しかなからうが、是非はともかくとして、後述するように、現代的論理が一貫しているのもこの映画の特徴である。
- (14) しかし『かさじぞう』等の例もあるし、そのような発想をすること自体が既にして近代的汚れにまみれているのかも知れない。「いわゆる現代的理性」という言い方をしたのはその謂いである。
- (15) 余談だが、この直前に現れる宇宙人は、強烈な光の中で良く見えないが、透明なビニールのような柔らかい素材の天女型をしている。これは恐らく可変型の生物で、だからこそ地球人そっくりの形状にもなれたという解釈であろう。
- (16) 但し、藤原仲麻呂の執政時代に一時式部省を文部省に改称した

(七五八〜七六四年) 以外は明治以降の呼称であり、古典の時代に原則として文部省は存在しない。粗筋のところでは述べたように、この映画の時代は七九〇年頃という設定であるから前記の時代にも該当せず、この呼称は現代人に分かりやすいためと思われる。

(17) 學燈社の『國文學』平成5年4月号「竹取物語フィクションの誕生」冒頭の対談で益田勝美氏も、「七月の望月に向かって物思うころから自分の素姓を知り、八月の望月のころ、「おのが身はこの国にもあらず。月の都の人なり」と決然と親にもいいます。七月のころ、人には知られない形で月の世界から彼女あての通信があったのか。もつと以前に知らされたのか」という発言をされている(二六頁)。してみるとこの映画で、本星からの迎への知らせがある前に一度、かぐや姫の乗った宇宙船の事故の詳細(＝彼女の素姓)を知らせる通信が入るという設定も、強ち荒唐無稽のものとも言い切れない。

(18) 因みに新潮日本古典集成の当該箇所には、「翁には月の都の實在信じられず、かぐや姫の言葉も死の隠喩としか理解できない。そこから、あなたの死にあうぐらいなら自分のほうが先に死んでしまいたい、という言葉が発せられるのである」という頭注が付されている。

(二〇〇六年四月二十八日受理)